

日本語学習者のカタカナ語と 類義語との使い分け

—産出文と自由記述の分析から—

山下直子（香川大学）・畑ゆかり（穴吹ビジネスカレッジ）
nyamash@ed.kagawa-u.ac.jp・rock1flat@yahoo.co.jp

【要約】

本研究では、効果的なカタカナ語の学習を探るため、カタカナ語と類義語を日本語学習者がどのように使い分けしているかを明らかにすることを目的とする。中上級レベルの日本語学習者 55 名を対象に、カタカナ語と類義の和語や漢語の使い分けに関する質問紙調査を行い分析した。その結果、学習者も自分なりのルールに基づき使い分けをしようとしているが、日本語母語話者とは違いやずれがみられ、使い分けが難しいことが明らかになった。

1. はじめに

日本語学習者にとって、カタカナ語は学習が難しいものの一つであり、その習得にはさまざまな困難がともなうことが指摘されている（石綿，2001 等）。しかし、多くの学習者がカタカナ語を苦手とすることは認識されていながら、漢字学習等に比べると先行研究は多いとはいえない（陣内，2008）。また、中山・陣内・桐生・三宅（2008）が述べているように、教育現場で十分な指導がされているとはいえないのが現状である。今後、効果的なカタカナ語の学習や指導を検討するため、指導の基礎資料となる調査研究を行うことが重要であると考えられる。

Nation（2001）は語彙知識を「語形」「意味」「使用」の三つに分類している。山下・畑・轟木（2015）では、カタカナ語の「表記」と「意味」に焦点をあてて日本語学習者を対象として調査を行った。その結果、既習語彙でも正しい表記が十分には定着していないことが明らかになったが、表記以外にも、さまざまな学習困難点があり検討が必要であるという課題が残った。特に、多くの学習者から意味はわかっても使えない等のカタカナ語の「使用」に関する声が多くあがった。

山下・畑・轟木（2018）では、「使用」と「意味」に焦点をあてて、カタカナ語と類義語の使い分けに関して日本語母語話者を対象者として質問紙調査を行った。その結果、個人差やゆれのある語がみられる一方で、母語話者は使い分けに一定の基準を持つことが明らかになった。使い分けの基準としては、①カタカナ語に類義語にはないニュアンスが付加されている、②カタカナ語のほうが類義語より多義的である、③カタカナ語が特定の使用に限られ類義語と役割分担している、の三つの基準が考えられるとしている。

従来、カタカナ語は周辺的な存在とされてきた。しかし、金（2011・2012）などで指摘されているように、生活の近代化により使用が進んだ「テレビ」等の具体的な名詞だけでなく抽象的な語も増え、

その一部は基本語彙として定着しつつある。カタカナ語がこれまで使われていた類義語に代わって使用される、あるいは類義語と共存して使われるようになってきている。これらの語を日本語母語話者は使い分けているが、具体的にどのように使うかについては辞書等にも記述もなく、日本語学習者にとっては大きな困難点となっている。水口（2002）は、外来語と類義語を使い分ける際、使い分けの基準に関するメタ言語知識が有効であることを指摘している。しかし、このような語彙の習得や使い分けに関する研究は少なく、茂木（2011）でも、困難点の解決に必要な基礎的情報が不足した状態にあると指摘している。

そこで、本研究では、効果的なカタカナ語学習を検討するために、カタカナ語の語彙知識の「使用」の側面からカタカナ語と類義語との使い分けに関して調査を行う。カタカナ語の中でも、基本的な語彙として定着しているサ変動詞に焦点をあてて日本語学習者に調査を行い、カタカナ語とその類義の和語や漢語が共起する語、用法や使われる文脈を探る。日本語母語話者の調査結果と比較し、日本語学習者がカタカナ語をどのように使用しているかを明らかにすることをめざす。なお、和製外来語や非外来語のカタカナ表記も増えており、今後、それらを含めた指導が必要になると考え、本稿ではカタカナ語という語を用いる。

2. 調査の概要

2. 1 調査対象者

調査対象者は日本語学習者 67 名のうち、無回答が 10 語以上ある者をのぞいた 55 名を分析の対象とした。日本語学習者は、日本の大学や日本語学校で学んでいる外国人留学生である。日本語レベルは中上級で日本語能力試験の N2 から N1 程度であり、年齢は全員が 20 代である。国籍は、中国 26 名、ベトナム 10 名、台湾 6 名、マレーシア 5 名、韓国 4 名、タイ 2 名とメキシコ、バングラディッシュがそれぞれ 1 名である。

2. 2 調査方法

意味の類似したカタカナ語と漢語あるいは和語の使い分けに関する質問紙調査を行った。調査期間は 2017 年 7 月から 2018 年 9 月である。事前に調査の概要と結果は研究にのみに利用し個人情報とは特定されないこと等を説明し、同意を得て調査を行った。質問紙の調査項目は、山下他（2018）の日本語母語話者に対する調査と同じであり、日本語学習者用に指示等を一部修正した。質問項目は、①カタカナ語とその類義語のペアを提示して、思いつく文をそれぞれ書いてもらう文産出法の問いと、②カタカナ語と類義語の違いや気づいたことについての自由記述である。

①の質問項目で産出された文の中で、カタカナ語と類義語が共起する語をそれぞれ抽出した。どのような語とともに使用されているのかを分析し、『日本国語大辞典』（2002）、『広辞苑 第七版』（2017）と『例文で読むカタカナ語の辞典』（1998）等の辞書に記述されたカタカナ語と類義語の語義を用いて、産出文を意味的に分類した。また、②の使い分けに関する自由記述を分析した。

2. 3 調査語彙

調査に用いた語彙は、カタカナ語の中で基本的な語彙として定着しているとされるサ変動詞とその類義語である。澤田（1993）の日本語教育のための基本外来語の和語または漢語と使い分けられている語で、「スル」をつけて動詞化する語（サ変動詞）のうち、茂木（2011）の BCCWJ（『現代日本語書

き言葉均衡コーパス』国立国語研究所)のコーパスで使われる頻度が高い外来語サ変動詞を選択した。『使い方の分かる類語例解辞典』(2003)等の複数の類義語辞典から選んだ類義語とカタカナ語をペアとして、その中で、山下他(2018)で日本語母語話者が使い分けに一定の基準を持つとされた12ペア(24語)を調査語彙として用いた。なお、類義語は一対一対応とは限らず、複数の語と類義関係を持つものもあるが、松尾・西尾・田中(1965)、水口(2002)を参考にして、本研究ではペアでの比較を行った。調査に用いた語のペアは、次の通りである。

アピールする・訴える, カットする・切る, カバーする・補う, サービスする・奉仕する,
サインする・署名する, スタートする・開始する, チェックする・点検する,
トレーニングする・練習する, プリントする・印刷する, リードする・率いる,
リ(レ)ポートする・報告する, リラックスする・くつろぐ

3. 質問紙調査の結果と考察

3. 1 全体的な結果

日本語学習者は、自分なりのルールに基づいてカタカナ語と類義語を使い分けようとしていることが明らかになった。自由記述でカタカナ語と類義語に違いがない等のコメントもみられたが、産出した文でカタカナ語も類義語も共起する語が同じペアは、「サインする・署名する」が14名(25.5%)と「プリントする・印刷する」が11名(20.0%)と比較的多いが、その他のペアでは何とか使い分けようとしている。

しかし、日本語母語話者と同じような語と共起する傾向のみられる産出文もあるものの、母語話者の使い分けとはずれや違いがみられた。誤用もあり無回答も平均3.86語(16.1%)みられ、個人差があるが自由記述も全体的に少ない¹。語の意味は理解できても文を作ることは簡単ではなく、カタカナ語と類義語の違いを具体的に記述することも難しいという意見が調査後に日本語学習者に行ったフォローアップインタビューでもあった。以下、三つの使い分け基準ごとに、具体的な産出文と自由記述の分析を行う。

3. 2 ニュアンスが付加されたカタカナ語

まず、カタカナ語に類義語にはないニュアンスが付加されているという基準①には、「カットする・切る」「サインする・署名する」「スタートする・開始する」「プリントする・印刷する」と「リ(レ)ポートする・報告する」の5ペアが当てはまると考えられる。

「スタートする・開始する」のペアは、『日本国語大辞典』(2002)等の辞書によると、「スタート」は、「(速さを競うスポーツで)出発すること。」「(広く)物事を始めること。車などが動き始めること。」という意味であり、「開始」は「物事を始めること。また、物事が始まること。」となっており、両者はよく似ている。しかし、松尾他(1965)や国立国語研究所(2006)などの先行研究で指摘されているように、カタカナ語には「目新しさ・新鮮さ」という付加的な意味が加わっている。山下他(2018)でも、日本語母語話者の「スタートする」の自由記述に、「単に始まるだけでなく、新しい何かが始まるというプラスのイメージ」、「軽やかさやいきいきとした様子が想像できる」、「新たな気持ち(決意)で出発」というコメントがあることを指摘している。

¹ 調査語彙のペアは動詞で提示したが、日本語学習者、母語話者ともに、名詞の形で文を産出した回答もみられた(「～カバーをする」など)。品詞の違い以外で問題がない場合は、誤用とせずに分析に加えた。

表1は産出文を意味的に分類した結果である。日本語学習者の産出文をみってみると、「レース」「リレー」などの「出走する」の意味の「スタートする」も、「試験」「会議」などを始める「スタートする」もあり、「スタートする」「開始する」ともに、共起する語が多岐にわたっており、一定の基準は見当たらなかった。母語話者の「スタートする」の産出文にみられた「新しい」や「新～」を用いた語は「新しい仕事」の1例に留まった。母語話者が感じる「新しい何かが始まる」というプラスの付加的なイメージはとらえられていないようであり、自由記述のコメントにもそのような記述はみられなかった。

表1. 「スタートする・開始する」の産出文の結果

スタートする	開始する
物事を始める 動き始める 「試験を」「会議を」「授業を」「勉強を」 「セールを」「テストを」など36例 ※「新しい仕事を」1例	物事を始める 物事が始まる 「試験を」「テストを」「授業を」「勉強を」 「試合を」「セールを」など54例
(スポーツで) 出発する 「レースを」「リレーを」など7例	

では、使い分けについて記述した日本語学習者は、どのような文を産出しているのか、両者を組み合わせさせてみる。「開始はスタートより公式的である」とした学習者は「試験を開始する。」「宴会をスタートする。」という文を産出している。これはカタカナ語の軽さといった全般的なイメージはわかっているが、「スタートする」という語のイメージまではとらえられていないようである。また、「開始は具体的で、スタートは抽象的」という使い分けでは、産出文は「授業は9時から開始する。」「この件をきっかけにスタートする。」であった。「スタートは単純に始めるの意味で、開始はイベント限定」では、産出文は「今日の一日は朝食でスタートする。」「結婚式を開始する。」である。カタカナ語と類義語を使い分けようとはしているが、母語話者のとらえ方とは異なっている。

「カットする・切る」では、「カットする」は、『日本国語大辞典』(2002)等によると「髪の毛など切り整える。映画など良くない部分を切り捨てる。給料などを一部削る。」「切る」は、刃物などで「分け離す。」「刀で傷つけたり、また、殺したりする。」、関係・気持ち・話などを「断つ。」や「辞職させる。」など意味が多岐にわたる。

表2に示したように、日本語学習者の産出した文は、「切る」は母語話者と同様に、つながっているものを「断つ」の意味の例文が最も多かった(49例 89.1%)が、それ以外の意味が用いられた例文は5例に留まり、母語話者との傾向とは異なる結果となった。「カットする」は、「映像をカットする」のような「削除」の意味の例文も12例産出されたが、「髪をカットする」のような「切り整える」という意味が最も多かった(34例 63.0%)。一方、日本語母語話者では、「場面をカットする」のように「一部を切り取ること。」という意味で用いられる産出文が最も多く(51例 46.4%)、両者の傾向は異なる結果となった。

表 2. 「カットする・切る」の産出文の結果

カットする	切る
切り整える 「髪を」「紙を」「果物を」 「ケーキを」など 34 例	断つ 「髪を」「紙を」「野菜を」など 49 例
止める 「電気を」「ガス供給を」など 3 例	傷つける 「手を」
よくない部分を切り捨てる 「映像を」 「不適切な所を」「余計な文章を」など 12 例	断つ 「縁を」「関係を」「連絡を」
一部削る 「予算を」など 4 例	辞職させる 「首を」

自由記述の「二つの違いはない」というコメントからは、2語を意識して使い分けていないことがわかる。また、「この映像をカットする」「かみを切る」という文を産出した学習者が自由記述のコメントにおいては、「カットするのほうが、切るより幅広く使える」と母語話者とは相反するコメントをしており、産出文は同じでも分析が正しいとは限らないといえよう。さらに、意味の広がりの違いに加えて、辞書の記述にも「カット」では、髪の毛を「切り整える」、映画製作で「よくない部分を切り捨てる」、宝石を「削って仕上げる」などとあり、「カットする」ことで整えて良くする意味が含まれる。母語話者の自由記述にも、「髪をカットするのほうが切り整える・改善するという意味がある」というコメントがあり、カタカナ語は「切る」ことがプラス評価につながるといったイメージがあると考えられる。しかし、このようなイメージは日本語学習者の自由記述には見られなかった。

自由記述と産出文をみると、「カットは美容室でしか使えないイメージ」と記述し、「明日、髪を切る。」「美容室で髪をカットする。」という文を産出しているように、「カットする」を美容室という場所に限定し使い分けている。あるいは、「切るは生き物だけ」として、産出文では「手を切る。」「かみをカットした。」や、「切るは具体的、カットするは抽象的」として、産出文では「果物・食べ物・野菜を切る。」「電源・信号をカットする。」といったように、「切る」対象で使い分けをしようとしている例もみられたが、いずれも日本語母語話者の持つような語のイメージはとらえられておらず、十分な分析はできていない。

3. 3 多義的なカタカナ語

使い分けの基準②は、カタカナ語のほうが類義語より多義的で、使える範囲が広いというものである。あてはまると考えられるのは、「カバーする・補う」「サービスする・奉仕する」「チェックする・点検する」と「リードする・率いる」である。これらの語は、意味が広がり、さまざまな語とより自由に共起し、複数の和語・漢語と対応している。先行研究でも、金（2012）では、意味が拡大し多義語化することでカタカナ語が類義語の上位に立ち基本語化するという指摘がある。また、宮島（1977）は、外来語の意味は漢語と比べて分析的ではなく「総合的」であり、宮田（2007）は、既存の語が持つ「しがらみ」がないので比較的自由にさまざまな語と共起できるという特徴があるとしている。

「チェックする・点検する」は、『日本国語大辞典』（2002）等の辞書で、それぞれ「完全であるかどうかを一つ一つ調べること。」「一つ一つをくわしく調べること。」という意味であり、一つ一つ調べる点は共通する。しかし、「チェック」は、「点検」以外にも「阻止すること。」や「確認して心に留めること。」「勘定をすること。」などの意味も持ち、より広い範囲で使われている。

日本語学習者の産出文では、「チェックする」は「宿題・課題」(14例)、「論文・作文」(12例)、「忘れ物・荷物」(7例)、「書類・資料」(6例)や、「予定・日程」(6例)など多くの語と共起している。一方で、「点検する」では、8割(43例 81.1%)を超える産出文で、「車・機械」「ガス・水道」やアルバイト先での業務に関連すると思われる「品物・在庫」などと共起しており、日本語母語話者の産出文と似た傾向を示している(表3参照)。

表3. 「チェックする・点検する」の産出文の結果

チェックする	点検する
完全であるかどうかを一つ一つ調べる 「宿題を」「課題を」など14例	一つ一つ詳しく調べる 「車を」「機械を」 「安全のために」など23例
「論文を」「作文を」など12例	「品物を」「在庫を」「レジを」など13例
「忘れ物を」「荷物を」など7例	「ガスを」「水道を」など7例
「書類を」「資料を」など6例	「宿題を」「課題を」など4例
「間違い」「ミス」など5例	「間違えたところを」「失敗の原因を」2例
確認して心に留める 「予定を」「日程を」など6例	

使い分けについて自由記述した学習者が、どのような文を産出したかをそれぞれみると、「点検は専門的ということ、チェックは日常で使うことに」と記述した学習者の産出文は、「テストの問題をチェックする。」「車を点検してもらおう。」であった。また、「点検するがより厳しい」は、「レポートをチェックする。」「ガスを点検する。」「チェックは普通の会話の時よく使う言葉、点検はちょっと硬い感じ」は「帰る前にトイレの電気を消しているかももう一度チェックしてくださいね。」「中間点検してください。」「チェックは軽くすることで、点検はそのことを深く見る」は、「家を出る前に忘れ物がないかチェックする。」「明日電気の点検がある。」である。

このように多義性に直接、言及はされていないが、「点検する」に専門性や厳密で安全面に関わるといった日本語母語話者と同じようなコメントがみられ、「チェックする」がより日常的に広く使用することはとらえている。産出文と自由記述の結果から、日本語学習者も「チェックする」と「点検する」の違いをある程度とらえているといえよう。

一方、「カバーする・補う」のペアでは、日本語学習者の結果は母語話者と違いがみられた。「カバー」は、『広辞苑』(2018)等によると、「補う」と置き換えが可能な「損失・不足・失敗などを補うこと。」の他にも、「物の表面を覆う。」「スポーツで、味方の選手の動きを助けること。」、比喩的におおることから「範囲に入れること。」や、すでに発表されている楽曲を演奏する「カバー・バージョンの略。」など、幅広い意味を持つ。母語話者は、産出文でも多くの語と共起さまざまな意味で使われている。しかし、学習者では、表4に示したように、「ミス」「欠点」などを「補う」(24例 53.3%)と「本」「スマホ」などを「覆う」(19例 42.2%)の以外の意味の産出文は2例のみである。「補う」と「覆う」の意味に限定され、共起する語も限られており、意味の広がりは見られない。

表 4. 「カバーする・補う」の産出文の結果

カバーする	補う
補う 「ミスを」「欠点を」「赤字を」など 24 例	不足を満たす 「不足を」「欠員を」 「ビタミンを」「燃料を」など 31 例
おおう 「本を」「スマホを」など 19 例	損害、罪などの埋め合わせ 「損失を」 「財政難を」「過失を」など 6 例
カバー・バージョン 「曲を」 1 例	
範囲に入れる 「この保険は何でも」 1 例	

自由記述は記入も 12 人 (21.8%) と少なく、日本語母語話者のように「カバーする」というカタカナ語の持つ多義性にも言及はされていない。また、自由記述で「カバーのほうが軽い感じ (使い方の軽さ)」と意味の違いに触れてはいるが、「メイクをカバーする。」「ふとんを補う。」という文を産出し、使い分けの記述と産出文との関連がわからない例もみられた。さらに、母語話者とは異なる使い分けもみられた。自由記述で、「カバーする」が「隠す」「外から保護する」で、「補う」は「補充する」という意味で使い分けしている学習者は、「ニキビをカバーする。」「食料を補う。」、あるいは「先の話、カバーしてくれてありがとう。」「明日の会議、必要なものを補ってください。」という文を産出している。「物の時カバー、さわれないものに補うを使うと思う」とした産出文は「本をカバーする。」「相手のミスを補う。」である。母語話者の結果にみられたようなカタカナ語のほうが意味に広がりがあり、さまざまな語とより自由に共起し、複数の和語・漢語と対応しているという点がとらえられていないと思われる。

3. 4 特定の分野に限られるカタカナ語

使い分けの基準③は、カタカナ語が特定の分野での使用に限られ、類義語と役割分担しているものである。この基準にあてはまると考えられるのは、今回の調査語彙では、「アピールする・訴える」、「トレーニングする・練習する」と「リラックスする・くつろぐ」の 3 ペアである。

「トレーニングする・練習する」のペアは、『日本国語大辞典』(2002)によると「トレーニング」は「練習。訓練。鍛錬。」「練習」は「学問や技芸などを繰り返し学習すること。また、一定の作業を反復して、その技術を身につけること。」とある。向上させるため一定の作業を繰り返し行う意味は共通しており、いずれも「毎日」「一年中」といった繰り返しを示す語と共起している。先行研究でも、松尾他 (1965: 189) は、「練習・けいこ」を意味するものには、スポーツでの「トレーニング」の他にも、教育・音楽・放送の分野でそれぞれ独自に取り入れられた「ドリル/レッスン/リハーサル」といったカタカナ語もあり類義関係が多様であるとしている。和語・漢語だけでなく、このような類義のカタカナ語も含めて、それぞれの分野ですみわけていると考えられる。

日本語学習者の産出文でも、「トレーニングする」は、「筋肉を」「体を」「ジムで」など 40 例 (74.1%) がスポーツに関連する文で用いられているが、「練習する」は、スポーツ関連 (14 例)、日本語学習などの学習関連 (21 例) や音楽関連 (13 例) と幅広く使われている点では母語話者と同様である (表 5 参照)。

表5. 「トレーニングする・練習する」の産出文の結果

トレーニングする	練習する
スポーツ 「筋肉を」「体を」「試合の前に」 「健康のために」「バドミントンを」 「ジムで」「体育館で」など40例	スポーツ 「サッカーを」「バドミントンを」 「試合の前に」「運動会のために」など14例
学習 「聴解を」「日本語を」など5例	学習 「日本語を」「会話を」「漢字を」など21例
音楽 「歌声を」	音楽 「ピアノを」「歌を」など13例
	その他 「発表を」「スピーチの原稿を」など5例

自由記述と産出文の組み合わせをみると、「トレーニングは体に関係があるもの、練習は何でも使えるイメージ」という記述では、「もっと強くなるためにトレーニングしましょう。」「漢字の書き方を練習しないと。」という文を産出し、「トレーニングはスポーツの分野だけ使う」では、「健康のためにトレーニングする。」「テストのために練習する。」を産出している。「練習のほうが範囲が広いと思う」では、「身体をトレーニングする。」「歌を練習する。」とそれぞれ使い分けている。母語話者と同じような自由記述もあり、日本語学習者も特定の分野に限られるということは理解していることがわかる。

しかし、具体的にどのような語と共起するかをみると、その傾向に違いもみられる。日本語学習者では「バドミントンをトレーニングする」など、「トレーニングする」がスポーツ競技を示す語と共起している産出文が8例あった。しかし、母語話者では、「練習する」では「野球を」など競技と共起する文が25例であったが、「サッカーのトレーニングする」1例のみで、自由記述でも、「トレーニングのほうが練習より具体的な何かを鍛えるイメージ」という意見があった。このように、「トレーニングする」の使用が主としてスポーツに関連する分野に限られるという大枠は学習者も理解しているが、語の共起が不自然な文も産出されており、使い分けのより明示的な指導が必要であると考えられる。

「リラックスする・くつろぐ」では、緊張をとりゆったりした気分になる点では共通しており、「リラックス」は『広辞苑』(2018)によると「くつろぐ。力を抜く。力を緩めること。弛緩。」「くつろぐ」は「心身をゆったりと楽にする。のんびり休む。」「ゆったりできる余地がある。」「安心する。落ち着く。」などとあるが、言い換えが必ずしもできるとはいえない。日本語母語話者の「くつろぐ」の産出文は、「家で」「部屋で」などの「〈ある場所〉でくつろぐ」の形が9割弱であった²。この点に関して、下岡(2013)でも、「くつろぐ」は常に場所を伴い、この場所は「必須成分に近いもの」であると指摘している。一方、「リラックスする」の産出文では、「音楽を聞いて」「アロマをたいて」などの具体的な〈何か〉をしての形が半数を超える。また、「面接」「試験」や「本番」などに緊張をとって臨むという場面は、「くつろぐ」には置き換えのきかない「リラックスする」のみの用法であり、両者のすみわけがみられる。

日本語学習者の産出した文でも、「リラックスする」は、「風呂で」「家で」などの「〈ある場所〉でリラックスする」(7例 14.0%)より、「音楽を聞いて」や「お茶を飲んで」などの「〈何か〉をしてリラックスする」(15例 30.0%)が多い点は母語話者と同じ傾向である(表6参照)。しかし、例えば「リラックスしてください」だけのよう、どのような場面で使っているのかという文脈がわかりにくい

² 「リビングでテレビを見ながらくつろぐ」などのように、「場所」と「何かをする」両方の要素を含む文は3例あり、それぞれでカウントした。

産出文が多くみられた。また、類義語の「くつろぐ」は産出文の無回答が61.8%と今回の調査語彙の中でも最も多く、「足をくつろぐ」「緊張をくつろぐ」等の誤用も多い。日本語能力試験の級外の語で難易度が高く、「聞いたことがない」という自由記述もあったように、学習者にとって日常であまり使わない馴染みのない語であり、意味はわかっているにもかかわらず文を作ることは困難であったと思われる。

表 6. 「リラックスする・くつろぐ」の産出文の結果

リラックスする	くつろぐ
〈場所〉で 「風呂で」「家で」など7例	〈場所〉で 「家で」3例
〈何か〉をして 「音楽を聞いて」「お茶飲んで」など15例	〈何か〉をして 「温泉に入って」「音楽でも聞いて」など5例
〈何か〉に臨む 「試験」	

ペアの違いに関する自由記述も8名のみであり、1名は「違いはなし」であった。日本語母語話者と近い「リラックスするは楽のため何かする。くつろぐはほっとした感じ」というコメントをして、「旅行してリラックスする」「家でくつろぐ」という文を産出している学習者もあった。しかし、「リラックスするはよく使う言葉。」で「くつろぐはあんまり見えない。小説や新聞記事とか、N1の問題集に出る。」と違いをとらえようとしているコメントもあったが、「試験終わったし、今夜ちょっとリラックスしよう。」「家族は夕ご飯後一緒にくつろいでいる。」と、産出文には使い分けは表れてはいない。また、「リラックスはプラスの意味を持つ。くつろぐはちょっとマイナスの意味。」のように母語話者の使い分けの基準とはずれがみられ、産出文でも「リラックスして勉強の圧力を軽減しました。」「週末に何もしないで家にくつろいでいた。」と、プラス・マイナスともいえない。

この「リラックスする・くつろぐ」など、類義の和語や漢語のほうの難易度が高く、馴染みもないペアでは、従来、学習者にとって難しいと言われるカタカナ語のほうをむしろ使用する傾向があり、「くつろぐ」を使うべき文脈でも「リラックスする」を使うという非用があるのかもしれないが、その点に関しては今後の検証が必要である。

4. まとめと今後の課題

カタカナ語とその類義語との使い分けに関して、日本語学習者に質問紙調査を行った。その結果、産出文で日本語母語話者と同じような語と共起する傾向がみられ、学習者も自分なりのルールに基づき使い分けをしようとしているペアもある。一方で、母語話者の使い分けとはずれや違いもみられた。母語話者は直感的に使い分けることが可能であるが、学習者は似た意味の類義語であることは分かっても、両者を使い分けることは難しいことが明らかになった。

しかし、今回の調査語彙は12ペアと限られた語である。また、調査方法として用いた文産出法は学習者にとって負担が大きく、違いを記述することも難しいという意見もあった。多くの日本語学習者は、どのように使い分けるべきかについて学ぶ機会はまだ少なく、帰納的に自らルールを見出していくほかない現状である。今後は、調査方法を工夫し、さらに多くの語に調査を行って、カタカナ語が使われる文脈やコロケーションを探り、個々の語の丸暗記だけでなくカタカナ語彙学習のための基礎資料を作ることをめざしたい。

謝辞 調査にご協力いただいた日本語学習者の皆さまに心より感謝いたします。

本研究は、JSPS 科研費 JP17K02852 の助成を受けたものです。

参考文献

- (1) 相澤正夫 (2007) 「外来語の現状に対する意識」『国立国語研究所報告 126 公共媒体の外来語』290-301
- (2) 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京堂出版
- (3) 金愛蘭 (2011) 『20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』 大阪大学日本語学講座
- (4) 金愛蘭 (2012) 「外来語の基本語化」陣内正敬 (編) 『外来語研究の新展開』231-270 おうふう
- (5) 国立国語研究所 (2006) 『新ことばシリーズ 19 外来語と現代社会』 国立印刷局
- (6) 澤田田津子 (1993) 「日本語教育のための基本外来語について」『奈良教育大学紀要』42(1), 225-239
- (7) 下岡邦子 (2013) 『『寛ぐ』と『リラックスする』』『日本言語文化研究』17, 10-24
- (8) 陣内正敬 (2008) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11, 47-60
- (9) 中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子 (2008) 「日本語教育における『カタカナ教育』の扱われ方」『日本語教育』138, 83-91
- (10) 松尾拾・西尾寅弥・田中章夫 (1965) 『類義語の研究』 国立国語研究所
- (11) 水口里香 (2002) 「類義語の使い分けにおけるメタ言語知識の役割」『日本文化学報』14, 139-152
- (12) 宮田公治 (2007) 「外来語『メリット』とその類義語の意味比較 - 新聞を資料として - 」『国立国語研究所報告 126 公共媒体の外来語』402-409
- (13) 宮島達夫 (1977) 「語彙の体系」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』1-41 岩波書店
- (14) 茂木俊伸 (2011) 「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析 - 『カットする』を例として - 」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ (研究成果報告書) 予稿集』, 103-110
- (15) 茂木俊伸 (2015) 「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析 - 『マークする』を例として - 」『文学部論叢』106, 83-95
- (16) 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子 (2015) 「カタカナ語の聞き取りテストとカタカナ語に関する意識調査 - 韓国語・タイ語・中国語母語話者の場合 - 」『比較文化研究』119, 81-90
- (17) 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子 (2018) 「日本語母語話者のカタカナ語と類義語の使い分け - カタカナ語とその類義の和語・漢語の調査から - 」『香川大学教育学部研究報告第 I 部』149, 45-52
- (18) Nation, I.S.P. (2001). Learning vocabulary in another language, Cambridge University Press.

辞書

- (1) 北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典 第二版』 大修館書店
- (2) 小学館辞典編集部編 (1998) 『例文で読むカタカナ語の辞典 第 3 版』 小学館
- (3) 小学館辞典編集部編 (2003) 『使い方の分かる類語例解辞典』 小学館
- (4) 新村出編 (2017) 『広辞苑 第七版』 岩波書店
- (5) 中村明編 (2015) 『新明解類語辞典』 三省堂
- (6) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2002) 『日本国語大辞典 第二版』 小学館